

群 教 セ	E09 - 01
	平 17.225 集

学校復帰に向けた子ども理解のための 情報共有と相互連携の研究

- 不登校児合同体験学習を通して -

長期研修員 狩野 昭彦

(研究の概要)

この研究は、不登校児合同体験学習（以下、合同体験学習と記す）をフィールドとして、子どもの理解を深め、学校復帰を目指した家庭、学校、教育支援センター（以下、適応指導教室と記す）の望ましい相互連携の在り方を考えたものである。キャンプという特別な場における子どもたちとのふれあいと「キャンプ便り」の活用や学校、適応指導教室の訪問を通して円環的、継続的に支援を繰り返し行う中から支援及び連携の在り方を考えた。

キーワード 【教育相談 不登校 学校復帰 連携 合同体験学習 フィールドワーク】

研究の基本的な考え方

1 不登校支援にかかわる群馬県の課題

文部科学省の「学校基本調査」及び「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（1991）においては、不登校児童生徒（以下、不登校児と記す）について、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由による者を除いたもの」と定義されている。

群馬県教育委員会のまとめによると、群馬県の不登校児の人数は平成13年度から減少傾向にあったが、平成16年度は小学校321人、中学校1603人で前年度比54人の増加である。これを発生率で見ると小学校0.27%、中学校2.7%とほぼ横ばい状態で、小学校では各校1人ずつ、中学校では各学級1人ずつの割合である。

このような状況の中、総合教育センターでは「援助・指導モデルと学校復帰プログラムの作成」「ほっとルームを中核とした予防的・開発的な生徒指導」「子育て支援プログラムによる予防的支援」「合同体験学習」の4つの支援を柱に、不登校対策支援推進事業を展開している。研究者は、これらの中から合同体験学習に視点を当てて、不登校児の学校復帰に向けた支援の在り方を考えていくこととした。

2 合同体験学習

合同体験学習は、キャンプ療法を通して参加不登校児（以下、子どもと記す）が仲間やスタッフと触れ合うことにより人間関係を広げたり絆を深めたりすることができる格好の場である。そして、自分の興味・関心をもとに支援を受けながら共有体験をし、自己課題を設定、解決する場面をつくることのできるよいチャンスでもある。

また、スタッフにとっても自己を成長させることのできる体験であるとともに、オリエンテーション等を通して参加者のニーズや実態を把握し、それに見合ったプログラムを作成することができるため、受容及び共感的な態度で支援し、信頼関係を深めやすい。さらに、非日常的な環境にあるため「退行」などの現象もおこりやすく、その子どもの背景や生育上の課題などをつかみやすいといったような利点もある。

このような合同体験学習への参加をきっかけに、自主性、社会性、対人関係能力等を身に付け学校復帰を実現していった子どももいる。しかし、必ずしも全員が目標を達成できているわけではなく、プログラムの中で見せた一人一人の活かさやエネルギーが、学校復帰にうまくつながっていかない場合もある。このような状況を踏まえ、家庭、学校、適応指導教室、総合教育センターが、どのように情報を共有し、連携をとっていけばいいのかを明らかにする。

研究の問い

合同体験学習に関しては、総合教育センターにおいても先行研究が行われている。これらの中に、「『言語』『表情』『身体の動き』などの対人コミュニケーションの手段に着目することが子どもの理解を深めるうえで有効な手だてである」(小林、斉藤 2000)ことや「活動を共にし、課題解決場面を共有し合うことで『人とかかわることの楽しさ』を十分に味わわせることが、次の活動へのエネルギーを生み出すことにつながる」(田中、宮田 2004)と述べられている。

これらのことから研究者は、合同体験学習を通して見取ることのできる子どもの実態や変容などの情報が、どのように共有され、生かされているのだろうかと考えるようになった。そしてこの視点から、不登校児の学校復帰に向けた支援を行う際に、家庭と学校、各地域の適応指導教室が協力体制を築き、支援を続けていくためには、どのような連携を取り合っていくことが望ましいのだろうかという問いを設定した。

研究の見通し

不登校児は、これまでの成長の過程の中で一人一人が異なった背景をもって現在に至り、様々な対象とのかかわりを通して自分自身の在り方をとらえている。このような状況の中で起こる不登校問題をそれぞれの個人的な問題として考えるのではなく、不登校児を取巻く周囲との関係の中で問題が生じているととらえる方が適当である。

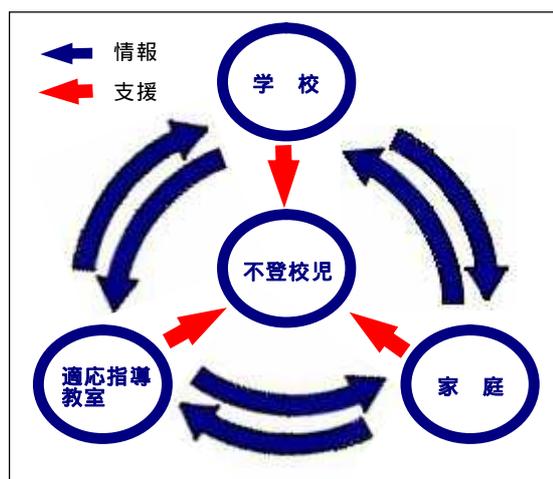
学校復帰に向けて支援していく過程では、生活及び人格形成の基盤である家庭と、学校、そして不登校児が家庭から学校へと踏み出すための支援を行う適応指導教室がお互いに問題を共有し、連携していくことが必要であると考えられる。

そして、それぞれの間で情報を十分に交換し合い、共通した理解や認識をもって包括的、円環的に支援を継続していくことが理想であろう(図1)。

しかしながら、不登校児が、家庭、学校、適応指導教室等におけるそれぞれの場面で表現した個性や感情を、三者が共通した情報として共有できていない状況も見られる。これは、一人の人間の全体像を異なった側面から見ているだけであり、不登校児への適切な支援に必要な情報が把握でき

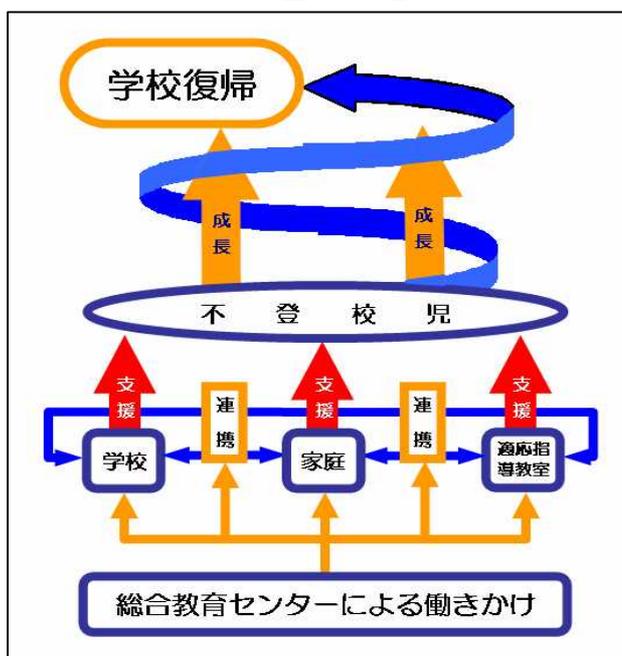
ている状態ではない。

図1 望ましい家庭、学校、適応指導教室の連携



そこで、総合教育センターの合同体験学習から見取ることのできる、子どもの活動の様子、活躍の場面等の情報を発信し、家庭、学校、適応指導教室が共有したうえで支援できるよう働きかけていくこととする。また、合同体験学習を経験することにより起こった、それぞれの場における表現や行動の変化等の情報を収集し、次のプログラムの作成に生かしながら、学校復帰に向けた新たな支援を模索していく(図2)。

図2 センターを含めた望ましい連携



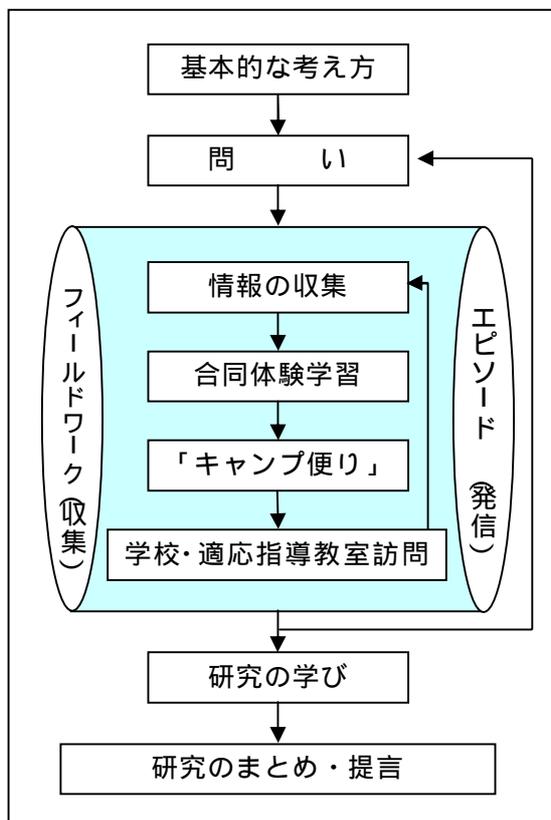
合同体験学習において、これらのことをくり返すことにより、周囲の支援者同士が、今まで知らなかった子どもの実態や非日常的な生活の中で起

こる現象などの情報を共有し、そのことを媒介にしてさらに連携を深めていく。そして、総合教育センターを含めた四者間の「つながり」の中で、それぞれの成長や変容に合わせた支援を見だししていくことができる。不登校児にかかわる全員が、共通の理解と協働の意識をもつことによって、学校復帰につながる支援体制ができていくであろうと考える。

このような実践を、円環的に継続していく中で学び取った事柄をもとに、フィールドワークを通して見取ることのできた複数のエピソードを参考にして、学校復帰につながる連携の在り方を提言していく。

なお、フィールドワークを通して行う研究の手順は、図3に示すとおりである。

図3 相互連携の研究の手順



研究の内容と実践

1 連携に向けた情報の収集

学校復帰を目指して不登校支援にあたるためには、合同体験学習を通して家庭、学校、適応指導教室との連携を深め、それぞれのもつ情報の収集及び発信が必要であると考え、各段階で次のように行った。

(1) 合同体験学習の準備段階

学校、適応指導教室との連携を築き、各参加者の情報やニーズを知るため、担任及び適応指導教室担当に「合同体験学習で付けさせたい力」「配慮事項」「保護者とのかかわり」「スタッフへの要望」「通学、通級時の様子」等に関する資料を依頼し作成してもらった。

家庭からは、参加申込み確認等の連絡の際に、日常生活の様子や配慮事項、保護者のかかわり方、キャンプ経験の有無、スタッフへの要望などの情報を得た。

事前オリエンテーションでは、ほかの子どもやスタッフとのかかわりの様子などの情報を収集した。また、参加してくれた保護者及び適応指導教室担当とのかかわりの様子等も観察した。

また、合同体験学習への関心を高め、見通しをもって参加できるよう、参加者及び保護者、関係者に実施要項や資料の配付も行った。

これらのことを行うことにより、一人一人の子どものおおよその実態がつかめ、班分けやプログラム作成などの参考になったが、学校、適応指導教室、家庭にそれぞれの視点があり、把握している実態や情報に多少の違いがあることも分かった。

(2) 合同体験学習中

それぞれの子どもに担当スタッフを置き、人間関係づくりやキャンププログラム（以下、プログラムと記す）に適應できるよう支援を行うとともに、子どもたちと一緒にプログラムに参加し、体験を共有しながら観察することにより情報の収集を行った。

秋季キャンプにおいては、不安の解消や子どもの内面を理解するために、担当スタッフと個別の面接、「お話タイム」という時間を設定した。その結果、満足した思いや悩みごとなど、一対一の話合いでなければ得られない情報を把握することができた。

一日のプログラム終了後には、毎日スタッフ会議を行い、一人一人の活動や表情から見取れたことやかかわりの様子などについての情報を出し合い、全スタッフが共通した情報として生かせるよう確認した。

また、参加、見学してくれた保護者や学校の担任及び適応指導教室担当とのかかわりの様子を観察した。

(3) 合同体験学習終了後

合同体験学習終了後にふりかえりの時間を設け、それぞれの子どもから反省や思いを聞くとともに「キャンプ便り」の配付等を通して実施後の様子や変容の情報を収集した。

また、「キャンプ同窓会」や保護者を対象としたグループ・カウンセリングや担当スタッフとの個別の面接を行い、合同体験学習後の生活の様子、かわりの変容等について情報交換を行った。

ここで、合同体験学習中に見取ることができた様々な努力や変容等を保護者に伝えることにより、それぞれの可能性への理解を深め、子どもとのかかわり方を見つめ直すための支援となるよう配慮した。このことにより、合同体験学習後の変容だけでなく、「我が子が合同体験学習に参加している間の家族の様子」「保護者が我が子に対してどうかかわろうとしているのか」などの情報も収集することができた。

保護者からの感想

「本人が、『ほかでは出せない自分が出せた』
 というのを聞いて嬉しかった」
 「本人が自分で決めて参加できたのでよい経験になった」

また、子どもの通う学校や適応指導教室を訪問することにより、合同体験学習後の変容や生活の様子についての情報を収集した。

これら(1)～(3)をそれぞれの合同体験学習において円環的に繰り返し行うことにより、それぞれの子どもの変容や周囲の支援の様子など多くの情報を収集することができた。

2 共有体験を通じた連携の場：合同体験学習

合同体験学習は、キャンプでの集団生活を通して、子どもの自主性、社会性、対人関係能力、集団への適応力の育成を図り、一人一人の学校復帰を目指すことにより、不登校問題の解決推進を図ることを目的として計画、実施されている。本年度の計画は以下の通りである。なお、日程の関係から、本研究は第1期から第5期までを対象として行った(表1)。

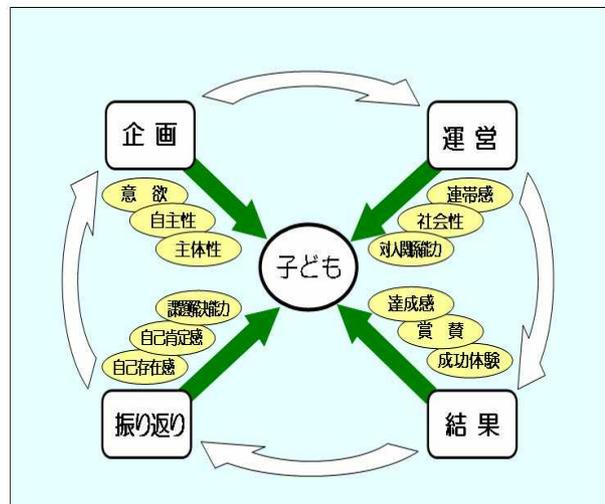
合同体験学習の日程やプログラムなどの内容は、事前に得られた情報を基に、子ども一人一人に身に付けさせたい力を検討し、個々の目的が達

表1 合同体験学習の実施計画

期	日 程
第1期	春季キャンプ 【1泊2日】 ・期日 6月14日(火)～15日(水) ・場所 総合教育センター
第2期	夏季キャンプ 【3泊4日】 ・期日 8月16日(火)～19日(金) ・場所 群馬県立北毛青年の家
第3期	秋季キャンプ 【3泊4日】 ・期日 10月4日(火)～7日(金) ・場所 群馬県立 桐生青少年野外活動センター
第4期	デイキャンプ 【日帰り】 ・期日 11月9日(水) ・場所 群馬県立妙義少年自然の家
第5期	スキーキャンプ 【1泊2日】 ・期日 12月20日(火)～21日(水) ・場所 宝台樹スキー場
第6期	お別れキャンプ 【日帰り】 ・期日 3月16日(木) ・場所 宝台樹スキー場周辺

成できるようスタッフが幅広く立案しておく。そして、オリエンテーションで子どもたちと共に考え、共通理解を図った上で企画、決定していった。さらに、様々な状況に対応できるようプログラムに柔軟性をもたせておき、必要に応じて調整を行った。これらの活動を子どもたちが企画、運営することにより、学校復帰に向けての様々な力が身に付いたと思われる。

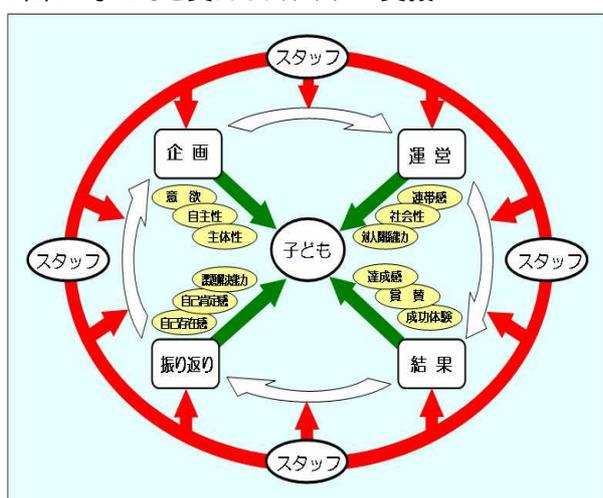
図4 プログラムの流れと子どもたちが得られる力



まず、企画に参加することで意欲や自主性、主体性などが生まれ、実際に仲間と協力し助け合っていくことで、連帯感や社会性、対人関係能力などの力が付いていく。そして、様々な経験を経て活動を無事終えることにより、成功体験や賞賛、達成感が得られ、ふりかえりによって自己存在感や自己肯定感を感じ、課題解決能力が伸ばされていくと考えられる（図4）。

合同体験学習において、スタッフ自らがモデルとなり、活動をともし、受容と共感を基本にあらゆる場面で認め、支援する立場で接することにより、子どもとスタッフの間のよりよい人間関係が築かれ、信頼関係が深まっていったと思われる（図5）。

図5 子どもを支えるスタッフの支援



そして、このような活動とかかわりを繰り返すことにより、それぞれの合同体験学習で子どもたちが身に付けることのできる力は、より大きなものとなっていくと考えられる。

また、スタッフ会議を毎日定期的に行うことにより、スタッフ全員が一人一人の情報を共有し、個人の目的とペースに合わせて子どもの支援にあたることができた。各担当スタッフが、収集することのできたそれぞれの子どもの情報を交換し、翌日からの支援方針を検討したり、プログラムの修正を行ったりすることで、より意欲的な姿勢への支援と、より多くの成功体験や達成感を得られる場面を設定することができたと考える。

3 情報の発信と共有を目指した「キャンプ便り」

(1) 「キャンプ便り」とは

合同体験学習を通して得た情報を、総合教育セ

ンターから情報発信するひとつの方法として「キャンプ便り」を作成した。

これには、プログラムを振り返る共通の紙面一面と、一人一人に向けた個人宛の紙面とを作成した。個人向けの面には、一緒に参加した子どもやスタッフとのかかわりの様子、様々なプログラムでの活動の様子等を撮影した写真のほか、各キャンプの目標に照らし合わせたテーマを設け、本人向けに『ひとこと』を載せた。

これは、ほかの子どもやスタッフから各個人に寄せられるもので、メッセージを送ってくれた相手の名前も掲載した。それぞれが、合同体験学習中に見せた、いいところや頑張ったところなど、肯定的で前向きな場面をとらえて書いてもらった。

なお、各合同体験学習の目標と「ひとこと」のテーマ(題)及びその視点は表2のようにまとめられる。

表2 キャンプの目標と「キャンプ便り」の題、視点

		内 容
春季 キャンプ	目 標	・集団生活を通して、参加者相互の仲間づくりを促す
	題	「スタッフから一言」
	視 点	・一人一人のいいところを見付ける [自己存在感]
夏季 キャンプ	目 標	・意欲や耐性、連帯感や仲間意識を育てる
	題	「みつけたよ!あなたのいいところ」
	視 点	・仲間のいいところを見付ける [他者理解、思いやり]
秋季 キャンプ	目 標	・自主性や社会性、対人関係能力や集団への適応力を高める
	題	「がんばったあなたにひとこと」
	視 点	・仲間の心に残ったところや印象的な出来事を取り上げ、言葉かけをする [気づき、思いやり]
デイ キャンプ	目 標	・子ども同士の相互交流を促進する ・子どもの主体的な行動を支援する
	題	「がんばった自分にひとこと」
	視 点	・自分自身のいいところ、頑張ったところを見付ける [自己肯定感、自己存在感]

(2) 「キャンプ便り」作成のねらい

ア 子どもに向けて

合同体験学習での様子やプログラムのふりかえりを通して自己理解を促進するとともに、ほかの子どもやスタッフからの視点に気づき、他者理解、自己存在感を深める。さらに、「ひとこと」などの間接的な賞賛を通して、これからの自分自身の在り方を考えるきっかけにし、自己肯定感や思いやりの心を育てる。

イ 家庭に向けて

実際のプログラムの内容や活動の様子及び仲間やスタッフとのかかわりの様子を知らせ、成長を分かち合うとともに、共有の話題を提供して声かけや家庭でのふりかえりの一助とする。

ウ 学校に向けて

実際のプログラムの内容や活動の様子及び仲間やスタッフとのかかわりの様子等を知らせるとともに、共通の話題の提供をして声かけの場面を増やし、ふりかえりや学校での指導の一助とする。

エ 適応指導教室に向けて

実際のプログラムの内容や活動の様子及び仲間やスタッフとのかかわりの様子等を知らせるとともに、共通の話題を提供して声かけの場面を増やし、適応指導教室での話合いやふりかえりの一助とする。

(3) 「キャンプ便り」に関する考察

「キャンプ便り」は、活躍した場面等の写真を多く掲載した個人宛の報告書のような形式をとっているが、回を重ねるごとに子どもの中でその発行を楽しみに待っている様子がみられるようになってきた。これには「ひとこと」の支える側面がとても大きい。

「ひとこと」の作成に際しては、それぞれが仲間を送るメッセージを絵文字や記号をふんだんに使い、日常の会話の雰囲気や忠実に表現しようと工夫したり、プログラムが終了し解散になった後もその場に残り全員に書き上げたりするなど、誠意をもって前向きに取り組む様子が見られた。

仲間やスタッフから送られる「ひとこと」は、それぞれはほんの数行であるが受け取った本人のもとでは大きなメッセージになっている。この「ひとこと」を通して間接的な賞賛を得ることにより、子どもたちは自己存在感や自己肯定感を感じることができているのである。

また、合同体験学習で共通の体験をした仲間意

識や連帯感から、お互いを肯定的に見つめ、前向きに評価しようとする思いやりの心を実感していると考えられる。

家庭、学校、適応指導教室においても、共通の話題をもつことにより、子ども本人との会話のきっかけの話題を増やすとともに、支援者同士の話題の提供にも役立った。

4 連携を深めるための学校、適応指導教室訪問

総合教育センターの合同体験学習に参加する子どもは、県内から広く集まっている。それぞれの地域において、二学期制の導入や授業日数の変更など独自性が強まり、児童生徒を取巻く学校環境も大きく変わってきている。

このような状況の中、子どもの学校復帰を目指して、学校及び適応指導教室と総合教育センターとの連携を深め信頼関係を築くため、またお互いがもっている情報の収集と発信の正確さを考慮した場合、それぞれの担当者と直接顔を合わせ、話し合う機会を多くもつことがより効果的であると考える、すべての参加した子どもの通う学校と適応指導教室を訪問することとした。

(1) 学校訪問

学校訪問においては、多くの場合、子どもの状況を一番よく把握している担任や養護教諭と、直接情報交換を行うことができた。そして、合同体験学習後の本人の変容及び家庭のかかわりの変化、登校時の様子、学級や学年、学校内での交友関係、相談員やスクールカウンセラーとのかかわり、地域性等、学校でしか知り得ない情報を収集することができた。

さらに、前担任、生徒指導主事、学年主任や校長、教頭等も同席し、異なった視点からの情報や教育相談部会のシステム、学校の受け入れ態勢等の話について説明してくれた学校もあった。

しかし、学校事情で担任や担当と直接情報交換できない場合もあり、「キャンプ便り」の配付だけで終わってしまったこともあった。

学校訪問から得られた情報

学校からの情報が一方通行で、本人の反応や対応の様子をうまくつかめない。

家庭の様子を知るため、あるいは本人に会うために家庭訪問をしたいが、そのきっかけが見付からずに困っている。

子どもの進路や進学希望の把握等、適応指導教室との連携の必要性は感じているが、時間と機会がなかなか見付からない。

これらの情報に関しては、家庭や適応指導教室と情報交換を行い連携を図る際に、合同体験学習を通して収集できた情報として随時伝え、連携の橋渡しができるよう心がけた。

また、積極的に合同体験学習にかかわりをもつために、事前オリエンテーションや合同体験学習に参加を希望してくれた学校もあった。学校行事や日程の関係から、実際には参加はなかなか難しいと考えていたが、生徒指導主事がプログラムに参加してくれた学校もあり、合同体験学習での様子を直接伝えることのできたエピソードのひとつとなった。

(2) 適応指導教室訪問

参加した子どもの中には、通級する適応指導教室を経由して参加申込みをすることも多い。この場合、家庭以外では子どもと接する機会が最も多いのはそれぞれの適応指導教室であり、豊富な情報をもっていると考えられる。

また、担当が子どもと共に参加し、スタッフとして支援に協力してくれる場合もあり、合同体験学習前後の生活や活動の変容に関する情報も詳しいと予想される。このことから、適応指導教室への訪問の必要性を強く感じた。

訪問の結果、それぞれの規模や施設、組織、体制等様々な環境の違いはあったが、日々の過ごし方、通級の様子、適応指導教室での交友関係、学習の進捗状況など適応指導教室ならではの貴重な情報が得られた。

適応指導教室訪問から得られた情報

子どもを登校させるタイミングを見付けるため、あるいは担任や担当と連絡をとる曜日や時間帯を確認するために、時間割等の配付物が手元にほしい。

家庭では好きではないことはやらずに生活しているので、少し我慢を覚えてほしい。

これらの内容に関しては家庭や学校と情報交換を行い連携を図る際に、合同体験学習を通して収集できた情報として随時伝えていくこととした。

5 つながりのエピソード 家庭と学校

「キャンプ便り」を学校に届けるために学校に行き、保護者と校門の前で車の中から手渡していた子どもが、このことをきっかけに、次第に車から降りられるようになり、一人で学校を訪れるようになった。そして、校舎内に入って相談室でほかの生徒と一緒に過ごせるようになっていった。

このエピソードの準備段階として、家庭と学校に連絡を取り「キャンプ便り」を本人が持参することへの共通理解を得よう配慮した。

これを受けて家庭では登校の動機づけをし、学校では教育相談部会において対策と方針を話し合った。

そして、家庭と学校が連絡を取り合って本人の登校が実現した。この事例の場合、服装も私服から学校の体操服へと変わっていき、一緒に過ごせる生徒の数も増えている。

学級担任と適応指導教室

学級の担任が適応指導教室を訪問し、「キャンプ便り」をもとに担当と情報を共有し合い、学校復帰に向けての話合いを行った。

このエピソードでは、なかなか適応指導教室との連携が取れなかった担任が、合同体験学習という共通の話題をもつことにより、話合いをもつきっかけが生まれた。

「キャンプ便り」を配付することで両者間の人間関係づくりの橋渡しができた。

家庭と適応指導教室と総合教育センター

同じ適応指導教室に通う仲間と、合同体験学習において合同プログラムを計画していたが参加できなかった子どもが、プログラム実現のため途中参加を希望し、保護者が遠隔のキャンプ地まで送迎してくれた。

このエピソードに関しては事前に、適応指導教室の担当が仲間や本人の気持ちを大切にしながら根気よく支援し続けていること、保護者が本人の希望によりいつでも対応できるよう準備をしてい

るということを情報として得ていたので、参加できる日に合同プログラムを実施できるような融通性をもたせた日程を計画しておいた。

そして、参加希望の連絡があった時点で、参加者全員に受け入れを要請し、日程の変更と雰囲気づくりの準備をした。

このことにより、スタッフだけではなく子どもたちの間にも温かく迎えようという気持ちが広がり、途中参加した子どもとうまくかわりもて、合同プログラムを成功させることができた。そして、本人も「来てよかった」「今までで一番いい思い出になった」と言っていた。

家庭と学校と適応指導教室

本人より合同体験学習途中から学校行事に参加したいという申し出のあった子どもに対して、家庭と学校、適応指導教室が、合同体験学習に参加していた適応指導教室担当を中心に連絡を取り合い、スクールカウンセラーの援助も得て学校行事参加に向けて準備を整えた。そして、母親がキャンプ地まで迎えに来て帰宅し、学校行事に向けて登校することができた。

このエピソードでは、合同体験学習中に本人の心の揺れを見取った担当スタッフが、参加していた適応指導教室担当と相談をしながら、家庭と学校に適宜連絡をとることにより受け入れ体制が整っていった。

また、周囲の支援者の間で、学校内でスクールカウンセラーとの連携がうまくとれていたこと、適応指導教室の担当が学校行事等の情報を把握していたこと、家庭との連絡が密に行われたことなど、適切な連携がとれていたことによると考えられる。

フィールドワークからの気づき

場と時間を共有することが大切

合同体験学習を通して見える子どもたちの表情は総じて明るい。仲間やスタッフと交わす会話も、リラックスしていて表情が豊かである。「キャンプ便り」を受け取った複数の保護者から「こんな笑顔は、見たことがなかった」といった感想も多く寄せられている。

これは、子どもたちの興味や自主性を尊重し、

プログラムの企画から運営までを任せ、そこから出される結果をもとにふりかえりをして次回の企画に発展させていくという活動に対して、スタッフも共に体験しながら円環的な支援を行った結果であろう。

それぞれの興味とペースに合わせて共通体験をすることにより、主体性や社会性、課題解決能力などを育てようと、スタッフ全員が、指導や評価するのではなく、受容と共感を基本に支援する立場で接しているからである。

また、合同体験学習においては、スタッフとしての学生、大学院生の存在がとても大きな役割を果たしていた。子どもたちにとって、スタッフと仲間の中間の位置に属し、年齢が近く親しみの感じることのできる存在の学生たちが、活動を共にしたり悩みを聞いたりしてくれることは、不安を減少させ、自主的に活動していこうとする心の支えになっていたと思われる。

直接触れ合い、同じ場と時間を共有し同じ体験をすることで、人間関係が築かれ信頼関係が深まっていくのである。

そして、このことは支援者同士の間にも言えることであろう。

本研究を進めるにあたり、のべ32の学校、適応指導教室を訪問したが、この経験を通して、「つながり」のある「温かい」支援体制をつくるには、やはり支援者同士が場と時間を共有することが大切であるということを感じた。特に支援者同士の人間関係づくりの段階では、お互いが顔を合わせ、共通の場を体験し、ふれあいをもつことが必要であろう。

電話やメールによる迅速な連絡が必要な場面もあるが、子どもたちの支援に関する情報は、文字や言葉では伝わりきらない部分や細部に至るまで正確を期すものが多い。

資料や面接、電話等では伝わらない情報が家庭訪問を通して得られるように、お互いの活動の様子や状況を把握することにより、不登校児に対する理解が深まり、支援の幅が広がっていくと考える。そして、支援者同士がお互いの情報を共有することによって、人間関係が築かれ、つながりのある支援が行えるようになっていくであろう。

「認める」「支える」という視点をもつことが大切

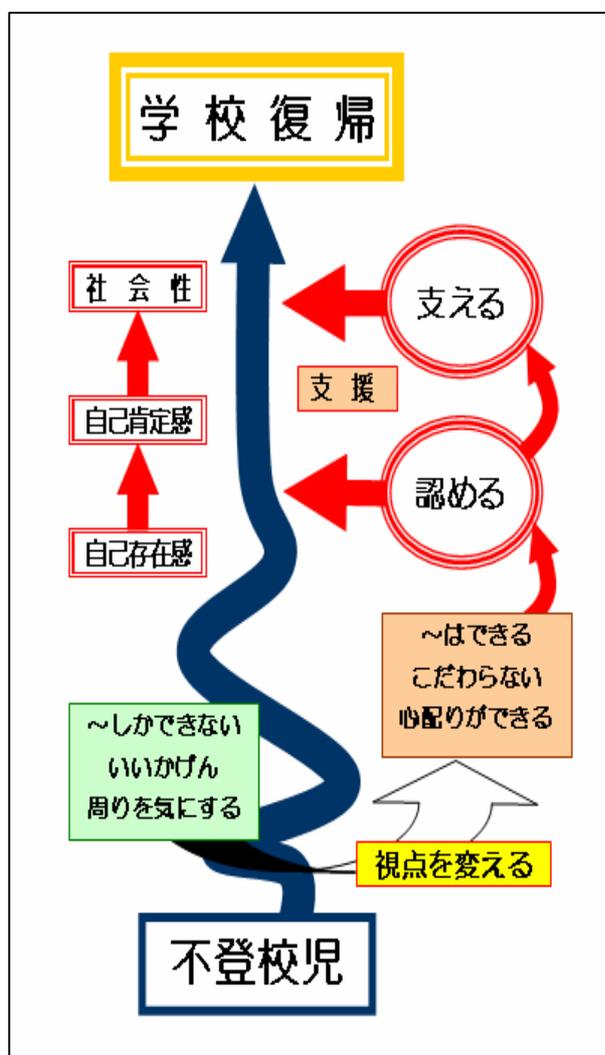
合同体験学習では、子どもたちの企画や運営、

参加などの体験に多少の遅れや失敗があっても支え、受け入れていく。このことにより子どもたちは達成感や成功体験が得られ、それを認め、賞賛することで自己存在感や自己肯定感が生まれてくることが分かった。

不登校児を支援していく過程において、指導することや教えることばかりではなく、時には視点を変えて違った側面から見つめ直すことも必要であろう。何かを「しない」ということも意志表示のひとつととらえて、言葉や行動を肯定的に見直してみることも大切である。

周囲との比較ではなく一人一人の思いを把握し「認める」、状況に合わせて「支える」という視点での対応が大切である（図6）。

図6 視点を変えた支援



このことにより、今までとは違った視点から支援を考えることができるようになり、より多くのかかわり方を見つけていけるようになる。

認め、支えることができれば、不登校児自身が自己存在感や自己肯定感を獲得して、社会性を身に付けていけるようになると思う。

毎日の学校現場においても、担任が不登校児のかかわりの中から賞賛できるポイントを見付け、学級の児童生徒たちに伝えることにより、不登校児にとってプラスの情報が共有され、学級の全員が支援者として連帯感をもって迎え入れようとする雰囲気づくりができる。

こうすることによって、受け入れられた不登校児にも連帯感や仲間意識をもたせ、達成感や自己存在感を与えることができ、社会性の獲得へとつながっていくであろう。

情報の共有が大切

「キャンプ便り」は、子どもとその家庭に意思を確認し許可を得た上で、共通の話題を提供し連携を深めるための資料として、各学校と適応指導教室に配付した。学校や適応指導教室の方々に見てもらうことに、「恥ずかしい」と話す子どももいた。

しかし、会話の中からは、「キャンプ便り」を通して普段とは違う自分を発見し、自分とかわる多くの人に「見てもらいたい」「認めてもらいたい」という気持ちも強く感じることができた。

このことから、周囲の支援者がみな同じように自分のことを分かってくれているという思いが、自己存在感を生み、学校復帰に向けた一歩を踏み出す後押しになっていると考えられる。

また、情報の共有がなされた上で、不登校児を取巻く支援者が、連携のとれた支援を行うことが必要であろう。立場やかかわる場所が違っていてもみんなが同じように温かく見守ってくれている、やさしく接してくれるという実感が得られれば意欲や自主性をもつことができ、課題解決能力や自己決定能力、集団への適応力の育成を図ることができると思う。

フィールドワークからの提言

連携のポイントは情報の質を上げること

ポイント1 エピソードを伝えることが必要！

不登校児童生徒の情報を伝えていく際に重要となるものはエピソードである。それぞれの場面で見せた表情及び行動から生まれるエピソードは、

その場面、その相手にしか得ることのできない情報が多く含まれている。

これからの情報の連携にあたっては、このエピソードを正確に伝えていくことが大切である。

ひとつのエピソードに対しての解釈は立場によって様々だが、起こった事柄を正確に伝えることによって、それぞれの支援者がそれぞれの立場から解釈をし、支援の手だてを考えていけるようになる。

こうすることによって、それぞれのかかわりに独自性が生まれ、幅広い支援が可能になる。

ここでは、エピソードを受け取る側の解釈が重要になってくる。つまり、受け取る側の質が問われていくことにもなるであろう。

ポイント2 意図を明確に発信することが必要！

不登校児童生徒に対して、家庭には家庭の、学校には学校のかかわり方があり、適応指導教室には適応指導教室のかかわり方がある。それぞれの長所を生かして支援にあたっていくことが、望ましい支援の在り方と言える。

しかし、それぞれの支援には限界がある。それを補っていくことが、連携のとれた支援といえよう。そして、お互いの限界を理解し、「つながる」ことのできる部分を見つけていくことにより、よりよい支援が生まれてくる。

この場合、大切なことは、お互いが支援の意図を明確に発信していくことである。それぞれの行う支援からはっきりとした意図が読み取れば、お互いを肯定的に見つめ、支え合った支援が可能になる。

そしてさらに、それぞれの支援者が自分の立場から不登校児と向き合い、よりよい支援を見付け出していこうとする「意志」をもつことも重要であろう。常によりよい支援を考え続けることによって、課題を解決していくための新しい手だてが見付けられていくはずである。

まとめと今後の課題

1 まとめ

研究の結果、以下のようなことが分かった。

学校、適応指導教室の訪問を繰り返すことにより、担任や担当の方々と直接会って情報交換を行うことができた。このことにより、人間関

係が築かれ、細かな部分に至るまで情報の共有ができた。

また、学校と適応指導教室の間で、同じ子どもの情報を収集、発信することにより、お互いが求めている情報の橋渡しができた。

「キャンプ便り」を通して子どもと家庭、学校、適応指導教室が、それぞれの場面において共有の話題で話ができるきっかけができた。また、「ひとこと」の活用は意図的にテーマ(題)を設定することにより、子どもの自己存在感及び自己肯定感を高めると共に、他者理解や思いやりの心を育てることができたと思われる。

2 今後の課題

今後の課題として、以下のことがあげられる。

学校、適応指導教室の訪問に際して、日程的な問題や時間的な制約などがあり、連携の難しさの一面を実感した。時期や曜日、時間帯といった細かな条件にまで配慮し、連携の計画を立てる必要性を感じた。

保護者や学校関係者にオリエンテーション及び合同体験学習へのかかわりを期待する場合、二学期制の秋休みであるとか県民の日、週末や祝祭日の利用等、日程的な配慮の必要性も考えられる。

合同体験学習を計画する際に、各地域の適応指導教室とネットワーク化を図り、各適応指導教室の特色を出すことのできるプログラムを取り入れたり、共通の目標を設定したりするなど、連携を深める手だてを考慮していく必要があると考えられる。

主な参考文献

- ・群馬県総合教育センター 実践ワークブック 不登校問題解決支援資料 改訂版(2005)
- ・「フィールドワークを用いた児童生徒理解」(小林久人、斉藤新吉 2000)
- ・「学校復帰につながる支援のあり方」(田中智一、宮田智 2004)
- ・A.V.ミッチェル、I.B.クロフォード 著 『キャンプ・カウンセリング』 ベースボール・マガジン社(1966)

(担当指導主事 野村 達之)